

実践レポート／ 探究の窓

VOL.9

本格実施から丸3年が経った「総合的な探究の時間」。
現場で試行錯誤が続くなか、
実践のヒントとなる探究の事例をご紹介します。

● 年間スケジュール（普通科）

1年

ビジコンに挑戦し、 探究の基礎を習得する

4～7月は教員が設定した共通テーマについて課題を設定し、探究のサイクルを回しつつ手法を体得。8月以降はビジネスコンテストに挑戦し、課題解決策の提案を通して探究の基礎を習得する。

2年

クラスごとのチーム探究で 地域課題にアプローチする

クラス単位のチーム探究で、地域課題の解決に取り組む。クラスごとに掲げた「大ビジョン」の下、グループごとに具体的なアクションにつながる「小ビジョン」を設定し、リーダーを中心に活動する。

3年

探究の手法を応用し、 自らの進路を探究する

4～7月は、リフレクションや志望理由書の作成などを通して内省を深め、進路や人生について考える。8月以降は、関心のある社会課題を取り上げ、進路と関連づけつつ整理・分析して発表する。

School Data

1870年創立／普通科・理数科・文理探究科／生徒数891人（男子459人・女子432人）／進路状況（2025年3月卒業）大学228人、就職1人、そのほか55人

山口高校（山口・県立）

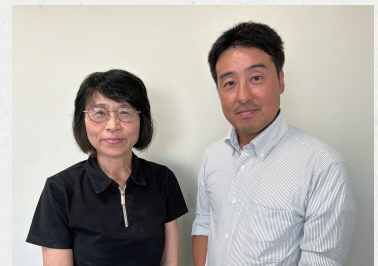
クラス単位のチーム探究で ビジョンに向かって 協働する術を学ぶ

探究活動推進室を開設し、 3年間を見通した学びを構築

山口高校では、総合的な探究の時間に取り組み始めた当初は、学びが体系化されておらず、学年や教員ごとにバラつきがあるのが課題だった。そこで、2023年度に「探究活動推進室」を開設。3年間

理論と実践を並行。まずは1回、 探究サイクルを回してみる

1年次の目標は、探究の基礎を身につけること。そのための手段として昨年度から活用しているのが、全国の高校生を対象にしたビジネスコンテスト（ビジコン）だ。「昨年度は準決勝まで進んだチームもあり、自ら探究のサイクルを回せる生徒、探究にハマる生徒が一定数いることを実感しました。一方、探究は生徒自身が実際にやってみないとわからないものだという気付きもあり、今年度はビジコンに挑戦する前



写真左から、探究活動推進室 副室長の中野充代先生、同室長の河内 満先生。

の4～7月に、探究サイクルを1周する経験をさせることにしました（河内先生）

4～7月の授業数は全6回。「米」という共通テーマについて、生徒はそれぞれ「なぜ価格が高騰しているか」「なぜ消費量が減っているか」「なぜ生産者は儲からないのか」といった課題を設定。問いの設定、情報収集、整理・分析、まとめ・表現といった探究の基礎的な手法を学びつつ実践し、夏休み前最後の授業で発表を行った。同副室長の河内先生は、次のように話す。

「昨年度のビジコンを通して、与えられたテーマを分析する力が足りないと感じていたのが、テーマに含まれるワードについて調べ、6W2Hで問い直して理解を深める、Whyを5回くり返す……といったことをレクチャーしつつ実践させました。時間的に厳しくやや強引だったという反省はありつつ、やってみて初めて探究がどういうものかわかった、という生徒の声を聞いて、やってよかったと感じました」（中野先生）

また、全員が同じテーマに取り組んだことについて「他の生徒が立てた課題やそれに対する分析を見て、同じテーマでもこんなに多様な視点やアプローチがあるんだという生徒の気づきにつながった」と中野先生。「友達の姿や発言に刺激を受けたり、友達からのフィードバックから学んだり、生徒同士の学び合いの効果は大きい」と言う。

8月以降は、チームに分かれてビジコンに挑戦する。事前にヒアリングした生徒の関心分野などに基づき教員がチームに分け、チームごとに企業が提示する課題に対する解決策を考案。クラス内でプレゼンテ

総合的な探究の時間 自己評価票① 提出 期7.17

学年 1年 学期 1学期 成績 成績 成績

【自己評価】 自分自身を評価し、自分の強みや弱みを明らかにし、今後の学習や生活に活かす。

1. 以下の項目について、自分の現状を評価し、今後の目標を設定してください。

A. 学習態度 B. 授業態度 C. 探究活動 D. 発表態度

項目	現状	目標
1. 授業中の発言	積極的に発言する機会がある。	A. 積極的に発言する機会を増やす。
2. 授業中の態度	授業中に集中して聞いている。	B. 授業中に集中して聞いている。
3. 探究活動への参加	探究活動に積極的に参加している。	C. 探究活動に積極的に参加している。
4. 発表時の態度	発表時に自信を持って発表している。	D. 発表時に自信を持って発表している。

2. 自分自身の強みや弱みを明らかにし、今後の学習や生活に活かす。

3. 今後の学習や生活の目標を設定し、達成するための計画を立てる。

山口高校では、リフレクションによる言語化も重視。節目ごとに「自己評価票」を配布し、数値での自己評価に加えて振り返りを記述させている。生徒には、授業の「感想」ではなく、活動を通して「気づき・学び」を書き残すよう伝えている。

●各クラスが掲げる「大ビジョン」の例(2025年度2年次生)

◎市民がすごしやすいまちづくり(観光客目線ではなく市民の目線で)

◎山口SLツアーで盛り上げよう

◎ふるさと納税で愛山口者を増やす

◎大農業都市山口 山口から全国へ

◎国際通りをつくろう♡

◎山口ジャングリング計画



写真左：クラス一帯となってチーム探究に取り組む生徒たち。クラスごとに掲げた大ビジョンの下、グループに分かれて地域課題の具体的な解決策を考案する。
写真右：2年次のチーム探究の最終発表会の様子。写真は、山口市内で14世紀後半から作られている漆器「大内塗」について発表する生徒。

「ビジョンを行い、代表チームを選出する。」「ビジョンは、あくまでも探究学習のモチベーションを高めるための手段。仲間との協働や、それにより満足感や達成感が得られることが大事」と中野先生。これが、2年次のチーム探究の原動力となるという。

チーム探究を通して、社会で必要になる協働の手法を学ぶ

山口高校の探究の特色が、2年次にクラス単位で地域課題の解決に取り組むチーム探究だ。県内屈指の進学校である同校では、生徒の多くは卒業後、県外に出る。「外に出る前に、地元でどんな課題があるかを知ってほしい。将来、活躍する場がどこであっても、率先して課題を解決しようという人材になってほしい、何らかの形で地域に還元してくれたら。そんな思いから、2年次の探究は地域課題をベースにしている」と河内先生は言う。

今年度の全体テーマは「山口市を盛り上げよう」。クラスごとに掲げる「大ビジョン」の下、5〜6人のグループごとに「小ビジョン」を掲げ、探究活動を行う。

「1年次の探究学習を踏まえて、何が地域の課題か、自分たちには何ができるか」と考えていくのですが、大ビジョンは大きくても小さくてもダメ。一方、小ビジョンはアクションにつながる具体的なものである必要があります。ビジョン決め、つまり課題設定が肝で、年度当初から3〜4カ月をかけて探っていきます(河内先生)

チーム探究には、地域の商店街の会長、市役所の職員といった地域の大人がメンター

ーとして関わる。メンターによるレクチャーや地域でのフィールドワークなどを通して、生徒は地域の実情や課題を知り、自分たちがいかにアプローチできるかを深めていく。夏休み明けからは、設定したビジョンの実現に向け、情報の収集・整理・分析、プレゼン資料の作成、中間発表、メンターによるフィードバックなどの一連の活動を経て、3月には最終発表会が行われる。最終発表会は外部からの参観も可能で、今年度は市の総合政策部公民連携推進室との連携や市長への提言なども計画中だ。

クラス単位のチーム探究は、同校がスクール・ミッションに掲げる「他者と協働しながら、新たな価値を創造して次代を切り拓きグローバルな社会に貢献できるリーダーたる人材の育成」にも紐づくものだ。クラス全体のまとめ役である「ディレクター」や各グループのリーダーを中心に、「生徒一人ひとりがリーダーであり、自覚と責任をもって活動に取り組むことを目指している」と河内先生。中野先生もこう続ける。

「それぞれが役割を担い、仲間と協力しつつビジョンの実現を目指すという、社会に出てから必要になる協働の仕方を学べるのが、チーム探究の最大の意義。探究を通して、生徒は教員から学ぶのではなく生徒同士で学び合うのだと、ピアラーニングの力を改めて実感しています」

探究学習と受験勉強は相容れないものではない

3年次は、1・2年次に身につけた探究の手法を応用し、自らの進路を探究する。

4〜7月は自己理解を深め、志望理由書の作成などを通して「自分は何がしたいか、自分の強みは何か、何のために勉強するのか」といったことを内省する。また、8月以降は関心のある未解決の社会課題を取り上げ、進路と関連づけつつ整理・分析して発表する。「受験勉強と探究学習は相容れないものではなく、3年次にこそ取り組む意味がある」と中野先生は強調する。

「私は英語科の教員ですが、生徒を見ていて、英語の長文読解のベースとなる知識や社会課題への理解が浅いという課題を感じていました。自分で調べ、他の生徒の発表を聞き、社会課題について理解を深めることは、英語以外の科目にも通じます。また、探究を通して磨かれる問いを深掘りする力、本質を掴む力も、特に昨今の大学入試との親和性は高いと感じています。教科と探究の往還は、今後も意識していきたいテーマです(中野先生)」

「変わってきたが課題でもある」と言うのが、探究に対する教員の意識だ。「なぜ?と問いかたたり、いいね!よく思いついたね!と声をかけたりしながら、生徒と一緒に楽しんで探究に取り組んでいる教員のクラスは、生徒もワクワクして取り組むようになり、結果として探究も深まる」と河内先生。また、「生徒がイキイキと発表する姿や探究を通して変容する姿を見て、探究に懐疑的だった教員の見方や意識が変わるケースも多く見てきた」と言う。教員が変われば生徒が変わり、生徒が変われば教員が変わる。この好循環をいかに作れるかがカギとなりそうだ。

まとめ

山口高校の探究のモットー

仲間と学び合い協働して、
地域課題にアプローチする

#チーム探究 #協働 #学び合い #地域課題解決

地域の課題を深掘りし、 ビジョンを設定する

2年次のチーム探究では、クラスごとに掲げる「大ビジョン」の下、グループごとの「小ビジョン」を設定。地域の実情把握や課題の掘り下げなど、ビジョン（＝課題）の設定には多くの時間を割いている。

情報は、現地に足を運び、 実際に見聞きして集める

情報収集で重視するのは、現地に足を運び、見聞きして情報を集めること。インターネットで調べればすぐにわかる情報をまとめたものは「調べ学習」であり、探究学習とは言えない。

課題の 設定

情報の 収集

整理・ 分析

まとめ・ 表現

発表後、英文要約付きの 探究論文としてまとめる

探究活動のまとめとして、中間発表、校内発表会で発表する（ビジコンでは書類や動画を作成・提出する）。チーム探究の活動の成果については、実現性の高いものを行政などに提言する。

「なぜ？」を重ねて 問題の本質を深掘りする

表面的な分析に終わらせないため、問題の本質はどこにあるのか、「なぜ？」を重ねて深掘りする。6W2Hによる具体的な分析や、自分が考えた解決案の社会的影響力についての考察も行う。

探究設計のPOINT

POINT ① 探究の手法を習得し、答えのない
問いと向き合う力を身につける

POINT ② 地域や社会と関わりをもち、
地域課題への理解を深める

POINT ③ 自己の在り方・生き方を
問い続ける態度を涵養する

評価基準

評価については、「自分で自分を評価する力」を重視。10項目についてA(3点)、B(2点)、C(1点)、D(0点)の4段階で評価(30点満点)する。

	評価項目
これまでの探究活動について	①探究学習の基本的な流れ※(下参照)を理解することができた。
	②「来」をテーマとした課題を設定することができた。
	③設定課題について現状分析をするための情報を収集することができた。
	④設定課題について解決案を考えることができた。
	⑤解決案を6W2Hで具体的に分析することができた。
	⑥解決案の社会的影響力について考察することができた。
発表について	⑦自分の担当スライドを期限内にまとめることができた。
	⑧自分の担当スライドについて、うまく発表することができた。
これまでの探究活動について	⑨班の話し合いで、自分の意見を積極的に出すことができた。
	⑩班の作業において、自分の役割をしっかりと果たすことができた。